

「ゴッホ展」－家族がつないだ画家の夢

藤原 道夫

昨秋「ゴッホ展」が都美術館にて開催され、TV 番組「日曜美術館」でその概要が紹介された。実物の絵を見たくなり、平日を選んで出かけた。11 時頃美術館に着くと、外に人影がちらほら見えるのみ。しめた！ 空いていると思いドアの内に入るや「最後尾」の看板を持った若者が目に留まった。「ゴッホ展」のチケットを求める列が何重にも連なっているではないか。愕然としたが並ぶしかない。チケットを入手してからさらに待ち、入場するまで 1 時間余かかった。この時貰ったちらしにある見出しを、文のタイトルにそのまま引用している。

「ゴッホ美術館」（アムステルダム）所蔵のフィンセント・ファン・ゴッホ（1853～1890）の作品約 30 点が展示されていた。関心を持てたのはただの 1 点「自画像」（1888 年初頭）のみ。画商を営んでいた弟テオの援助を受けながら、パリで細々と描いていた時の作品。赤髭を生やした平凡な壮年がキャンバスに向かって筆をとっている。アルルに行く前で精神的に落ち着いていたのだろう、狂気の気配が見えないし野心もないような目つきに思えた。しかし、絵は独得の色彩と筆使で描かれており、見る人の心を強く捉える力を持っている。

ゴッホの絵は若い時から画集で見してきた。後年あちこちで真筆の絵に出会う。最もまとまっていたのは「ゴッホ美術館」だろう、画集で見えていた多くの作品が展示されている。それらに混じって「花咲くアーモンドの木の枝」と題した小品を見つけた。アルルの青空を背景に小枝にちらほら花が咲いている、という単純な絵だ。これは弟テオ夫妻に男子が生まれたのを祝福して描かれたことを知った。狂気の発作を起こしてアルル近くのサン・レミ病院に入院中ながら、あのような明るく穏やかな絵を描いたという事実にとっても感動した。

ゴッホはテオ宛の手紙に「画家にとって最も重要なことは、作品によって次の世代に語りかけることだ」と書いている。今回の「ゴッホ展」では、家族の絆により約 2,000 点に及ぶ遺作が散逸することなく、多くは「ゴッホ美術館」に残された経緯が解説されていた。

生前にはただの 1 点しか売れず、多くの作品を残したままゴッホは狂気がもとで亡くなった。兄に続いて間もなくテオも病死する。遣り手だったのは妻のヨーだった。画商を営む夫の仕事ぶりを見て学び、先を見る目も養っていたのだろう。そして、確かなことは分らないが、夫婦共ゴッホの描いた絵の優れた独創性を理解していたのではなかろうか、将来き

と評価されるだろうと。

ヨーは多くの人たちに義兄の作品を見て貰うため展覧会を開くとともに、絵を慎重に売りさばく。今や有名になった「ひまわり」の一点は、「ナショナル・ギャラリー」（ロンドン）に買い上げられ、絵の評価が高まる。アメリカの画商とも上手に交渉し、絵を高額で買い取って貰った。息子のフィンセント・ウィルムは財団を創設し、伯父の作品の保全に努めた。手紙に残したゴッホの思いは、遺族の努力によって実現していく。

会場には絵だけでなく、ゴッホがテオ宛に書いた手紙も展示されていた。また、ゴッホの生涯や家族との関係について映像を駆使して分かり易く解説するコーナーも設けられていた。部屋の壁にアムステルダムで見た「花咲くアーモンドの木の枝」が大きく映し出されていたことも印象に残った。

今回の「ゴッホ展」は、ゴッホの作品や人物についてより深く知るのによい機会であった。